堕ちた二人のパイロットの背景にあった事情
ロベルト・ボラーニョの『彼方の星』と フアン・ガブリエル・バスケスの『落下する物の音』 ——個人と国家の追憶小説としての分析

マヌエル・アスアヘ=アラモ

0. はじめに

1953 年生まれのチリ人作家ロベルト・ボラーニョ（Roberto Bolaño）と 1973 年生まれのコロンビア人作家フアン・ガブリエル・バスケス（Juan Gabriel Vásquez）は歳が 20 歳も違えば、それぞれの作品が題材としているモチーフ、文学的な影響を受けた書物も大きく違っている。ボラーニョは詩人として出発し、やがて晩年に小説家へ転身したのに対し [1]、バスケスはコンラッドなどの現代小説家の作品を読み通して最初から小説の書き手になることを目指して、外国文学をスペイン語に翻訳した経験も持つ作家である [2]。

ボラーニョの人生を決定付けた、ピノチェ将軍がアジェンデ政権を倒したチリのクーデターが起きた 1973 年、コロンビアでバスケスが生まれた。世代も見てきた世界もまったく異なる二人の小説家のはずだが、両者には*Estrella distante*（1996、以下『彼方の星』）と*El ruido de las cosas al caer*（2011、以下『落下する物の音』）[3]という、物語の構造が類似している二つの作品がある。本論の目的は、この両作品の製作過程の背景と、それらに共通している物語的な手法と要素を考えることである。

1. 麻薬密売小説——ラテンアメリカ文学の新たなサブジャンル

現代ラテンアメリカ文学を通観すると、独裁者小説というサブジャンルの存在がその文学を特徴付けるような感覚を受けざるをえない。20 世紀前半のものはさておき、20 世紀後半からはミゲル・アンヘル・アストゥリアス、ロア＝バストス、アレホ・カルペンティエル、ガルシア＝マルケス、バルガス＝リョサなどが少なくとも一冊、または数冊の独裁者小説を発表している [4]。様々な作家たちが、族長に行政を任せてしまう傾向にあるラテンアメリカの歴史を残酷で時には切実な視点で、またある時には神話的でコミカルな観点でとらえながら、独裁者小説を書いてきた。しかし、ラテンアメリカ地域における 80 年

代以降の民主主義の拡張と、21 世紀への突入に伴い、新しいサブジャンルがまさに生み出されたことが、数多くの論者によって指摘されてきた。それが、麻薬密売小説である。

かつてのラテンアメリカ文学が 19 世紀と 20 世紀初期には「文明」対「未開」の葛藤（la civilización contra la barbarie）[5]、20 世紀には族長を象徴する独裁政権といった [6]、当時前面にあった歴史的な事柄から大きなヒントを得たのと同じく、21 世紀のラテンアメリカ文学は、現在その国々が最も苛まれている社会問題を題材にすることが多いことは驚くにあたらない [7]。そのジャンルの代表作であるフェルナンド・バジェホの*La virgen de los sicarios*（『殺し屋の聖母』）からボラーニョの『2666』まで、麻薬密売の莫大な資金から生まれる体系化した暴力の連鎖、拉致や殺人を含む数々の事件、麻薬商人による政治への介入が生み出す汚職問題などを背景とする作品が、20 世紀末期と 21 世紀のラテンアメリカ文学において大きな位置を占めている。この問題を描かずには、現在のラテンアメリカを語ることができず、ある意味では避けて通れない道のようなものになっている。

21 世紀のラテンアメリカにおいて、もはや族長は玉座から姿を消している。南米のほとんどの国では選挙によって政権交代が行われ、前世紀半ばまでには想像しがたかった程に政治が安定しているのがその最大の原因かもしれない。現在ラテンアメリカに立ちはだかる問題は、麻薬の輸出から高収入を得ている組織が互いにしかける権力争いである。20 世紀に米国がラテンアメリカの多くの独裁政権を影で支援していたのと同様、ラテンアメリカで製造される麻薬の最大の市場が米国であるという事実が、一世紀を通しても変わらないアメリカ大陸の力関係を物語っている。冷戦時代に起きた新植民地主義の基で行われた米国のラテンアメリカへの介入が、21 世紀に新たな形をとっているのである。米国が消費されるものが南米で製造されるが、この裏経済が南米にあまりにも大きい賠償を負わせている。とりわけアメリカと陸続きの国境を持つメキシコが大きな危機に直面していることはよく指摘される。たとえば、ボラーニョの遺作となった傑作『2666』は、国境に接するソノラ州のサンタテレサという架空の町を舞台とする巨大な犯罪の物語となっている [8]。

こうしてみると、チリ人作家のロベルト・ボラーニョは独裁小説と麻薬密売小説の境界線を跨ぐ作家と見なすことができるだろう。初期の作品『アメリカ大陸のナチ文学』と『彼方の星』は、チリやアルゼンチンの右翼独裁政権を背景にしており、とりわけ後者の場合には独裁政権の手下による鎮圧と殺人が描かれている。

一方、21 世紀に入ってから小説家デビューをしたコロンビア人作家のフアン・ガブリエル・バスケスのような作家がいる。第二次世界大戦時代にコロンビアで行われたドイツ人に対しての差別を描いたデビュー作*Los Informantes*（『密告者たち』）を発表した後、第二の作品『落下する物の音』では 80 年代からコロンビアの首都、ボゴタに住む人々が

麻薬密売に対して抱いていた恐怖感を題材にしている。バスケスはこの小説でAlfaguara賞を受賞し、海外で行われるブックフェアでの講演や、自身の作品の外国語翻訳を多数出版するなど、近年新世代のコロンビア人作家の旗手として世界的に注目を浴びている[9]。

前代のマジック・リアリズムに対しては、ボラーニョもバスケスも反発しており、マジック・リアリズムと名乗っている紋切り型の作品の大流出に飽きしているとインタビューやエッセーなどで述べている[10]。彼らはマジック・リアリズムの約束事のような超現実的な事柄や大げさな描写などを用いずに作品を執筆している。しかし、彼らの文体と作品の雰囲気が決して似ているわけではない。彼らの作風のあいだに類似はさほど見られず、むしろ相違のほうが目立つ。ボラーニョの作風には皮肉めいた声、文学に関するマニアともいえる博識の披露など、元詩人特有の文体がある。これに対してバスケスが駆使するリアリズムはコンラッドからの影響が強く、確実な心理描写に力を注いでおり、ボラーニョのような数多くの文学への言及がない。

ボラーニョの人生経験には「移動」が大きい意味を持っている。チリで生まれながら少年時代に家族とメキシコへ移住し、17 歳のころにまたチリに一時帰国するもののクーデターに阻まれて、それ以来メキシコ、後にスペインに住む。バスケスもコロンビアで生まれ育ったが、大学卒業後フランス、ベルギー、スペインに移り住む[11]。こうして二人とも海外に住み、記憶を辿りながら母国を舞台にした作品を発表した。本論の研究対象であるボラーニョの『彼方の星』とバスケスの『落下する物の音』も、20 世紀におけるそれぞれの母国の重要な時代を描いている。次章では、チリとコロンビアを不安定な歴史を持つ南米の中でも例外的な国と見なす観点から、ボラーニョとバスケスの作品の共通点にアプローチしたい。

2. チリとコロンビア・20 年間の隔たりで起きた暴力事件の悲惨さ

小説を通じて母国の主要な歴史や言い伝えを描くことは、おそらく世界中の作家に共通する作業だろう。たとえば、ラテンアメリカ文学において先行世代のガルシア＝マルケスとバルガス＝リョサは、優れた歴史小説や、自国の現状を巧みに描写した小説をすでに書いている。しかし本稿では、同様の歴史を持つ国を母国とする二人の作家のあいだにおこる同時多発性という視点から、彼らが描いている地域の共通点について考察したい。この二人の作家が、20 年間という隔たりで起きた母国の暴力的な時代（1973 年にチリのクーデターが起き、その 20 年後の 1993 年にコロンビア麻薬マフィアの大御所パブロ・エスコバールが殺されている）を回想する小説を描くという共時性を出発点に、両作品を同類の作品として考えたい。

チリとコロンビアの歴史を振り返ると、現在まで両国を特徴付ける歴史的大事件として、チリにおいてもコロンビアにおいても、大統領と大統領の候補者が殺害されたことが挙げられる。コロンビアの場合は左翼の指導者ガイタンが大統領選挙に立候補した 1948 年に暗殺されたことを火種に十年間の長い不安定な時代が始まった。この時代は“La Violencia”（暴力の時代）として呼ばれるようになったが、後に 60 年代に始まった左翼軍と右翼軍のゲリラ内戦の始まりと見ることもできる。やがて麻薬密売グループはゲリラが統制する地域を拠点にし、得た資金によってさらなる暴力行為を行い、状況は悪化する一方である。まだ決着のつかない内戦の火種だったガイタンの暗殺の黒幕は未だに不明で、その暗殺が現在のコロンビアに影を落としている。『落下する物の音』の主人公は、この大統領候補の暗殺から生まれたゲリラ戦に麻薬密売軍が加わり、さらに政府側からの鎮圧の強化から生じた暴力の連鎖を見る毎日に、80 年代後半と 90 年代前半のボゴタの市民はみな慣れていたと述べている。

> (Hablo de) la violencia cuyos actores son colectivos y se escriben con mayúsculas: el Estado, el Cartel, el Ejercito, el Frente. Los bogotanos nos habíamos acostumbrado a ella porque sus imágenes nos llegaban con portentosa regularidad desde los noticieros y los periódicos. (6)

コロンビアの＜暴力の時代＞から 15 年後、大統領立候補ガイタンの暗殺と類似する事件がチリで起きた。その事件が 20 世紀のチリの様相を決定的に変えてしまう結果となった。

1973 年にアメリカ大陸で社会主義者として始めて当選した大統領アジェンデは南米全体の左翼系の無数の若者たちにとって希望の星だった。ゲリラ戦で成功したキューバ革命と異なり、当時チリで左翼政権が選挙で成立したことに対して、大陸の保守的な者たちは、さらに拡大する左翼の勢力の前兆として懸念した。

しかし、1973 年 9 月 11 日の夜、ピノチェ将軍が指揮したクーデターで最後まで戦ってみせたアジェンデが殺された。その後、ピノチェを筆頭に、17 年にも及んだ軍政が敷かれ、反対勢力に対して残酷な鎮圧が行われ、何万人もの行方不明者（desaparecidos）が出てしまった。

チリのクーデターとその結果は、絶え間なくボラーニョの作品に頻出するモチーフである。ピノチェの独裁体制を直接体験したと語っていたボラーニョは、牢獄に入れられた体験を短編小説に用いたことがあり、『彼方の星』の第二章もこれに基づいていると考えられる。

> Por aquellos días, mientras se hundían los últimos botes salvavidas de la Unidad Popular, caí preso. Las circunstancias son banales, cuando no grotescas　(34)

間接的とはいえ、この小説はピノチェ時代に何の痕跡も残さずに消えた人々の存在が主要なテーマである。主人公の憧れだった姉妹もこうして「行方不明」とされ、数年後、集団墓地に死体が現れるのみだ。

> Y nunca se encontraran los cadáveres, o si, hay un cadáver, un solo cadáver que aparecerá años después en una fosa común, el de Angélica Garmencia (…) como para probar que Carlos Wieder es un hombre y no un dios. (33)

周りの人々がある日殺され、消されているかもしれないという恐怖が日常だった時代を描いているのが『彼方の星』である。

こうして、チリとコロンビアは華やかな文学に恵まれる一方、黒い歴史があり、そのモチーフもまた両国の文学に濃い影を投げかけている。むろん中米、南米に独裁政権を経験した国は多いが、ピノチェ政権ほど悪名の高い独裁政権はないだろう。一つの例として、あのボルヘスさえ、ピノチェ政権から勲章を受け取ったことがノーベル賞授与を拒まれた理由とされているくらいだ[12]。同様に、内戦状況を経験した南米の国は他にもあるものの、コロンビアの場合ほど内戦が長期間にわたった例はない。この点に関しては、ラテンアメリカにおいてコロンビアとチリの例は特殊であると考えてもいいだろう。

チリとコロンビアの歴史を例外と見なした上で両国の作家の作品を考えると、初めてボラーニョとバスケスの作品の共通点と相違にアプローチできることになる。本論が取り上げる二作では、主人公が自国で体験した「恐怖」の記憶を物語を通じて具現化し、それを再構築しているが、その過程における両作品の物語的な要素は非常に類似している[13]。その理由はおそらくチリとコロンビアの物語であることによると思われる。

ボラーニョの『彼方の星』とバスケスの『落下する物の音』は、コロンビアとチリに起きた暴力的な歴史に対して、主人公たちが立ち向かう姿勢はそれぞれ異なるが、両作品の間には興味深い共通点がある。それらは単に物語論的な要素から生まれる現象ではなく、ボラーニョとバスケスの出身国から生まれる共通性である。次章では具体的に両作品の登場人物の共通点について考察したい。

3. ラベレデとビーダー――追憶小説『彼方の星』と『落下する物の音』におけるキーパーソン

まず、この二つの中編小説のストーリーに焦点を当ててみよう。『彼方の星』は探偵小説の形を借りた独裁小説だといえるだろう。この小説は一人称で語られているが、序文を読んでみるとその入れ子状の構成がわかるはずである。そこには、書き手のボラーニョと推測できる人物が、友達のアルトゥーロ B（Arturo　B）の証言を参考にしながらボラーニョの前作『アメリカ大陸のナチ文学』の最終章に登場するラミレス・ホッフマン（Ramírez Hoffman）の物語を再構築し、独立した物語として書く経緯を述べている。読者が『彼方の星』のテキストを読んでみると、ホッフマンが今回カルロス・ビーダー（Carlos Weider）という人物としてよみがえり、この中編小説の最重要人物になっていることがわかる。彼の振る舞いを事の初めから注意していた一人称の語り手アルトゥーロ B は、物語の中でスペインのブラネス町に住んでおり、自らがチリで過ごした青年時代を振り返りながらビーダーについて書き綴る。半ばからビーダーの正体を追っていく私立探偵と出会い、彼に協力する。そして終盤、語り手には見えないところで、ビーダーがこの私立探偵に殺されたことが暗示され、物語は完結する。犯人の行方を追及するという筋立てが利用されていることからも、この小説はある種の探偵小説として読めることがわかるはずである。

『落下する物の音』も探偵小説として読むことが可能である。あるいは、少なくとも主人公が謎めいた人物の正体を暴こうとすることを考慮すれば、思い浮かぶのは探偵小説のジャンルだろう。『彼方の星』と異なり、バスケスの小説は入れ子状の構造を欠いており、メタフィクショナルな遊びも皆無に近い。現実と重なっているところがあるとすれば、それは主人公・語り手のアントニオ・ヤンマラ（Antonio Yanmara）が作者バスケスとほぼ同い年であること、バスケスと同世代ゆえに、80 年代の麻薬戦争の暴力に関しての記憶を共有していることである。母国の暗黒に彩られた集合的記憶を呼び覚ますという構造は、ボラーニョの作品と一部重なり合っている。

主人公・語り手が、主に謎の人物、リカルド・ラベルデの物語を語る。これは一つの問わず語りである。語りの始まりから数年前、主人公が偶然ラベルデの傍らを歩いていると、ラベルデはバイクに乗っていた二人の暗殺者に撃たれる。生活に不安を感じる主人公は、撃たれて死んだラベルデの正体を知れば、自分が感じている恐怖がどうにか治まると信じ、謎の人物の暗殺の裏にあった物語を探っていく。このようなあらすじは、主人公を探偵としたミステリー小説に特有のものと言えるだろう。

これらの二作で追憶の対象となっている人物を検証してみよう。『彼方の星』では、ビーダーであるわけだが、彼のイメージは小説の冒頭で当時のアジェンデ大統領と結ばれている。

> La primera vez que vi a Carlos Wieder fue en 1971 o tal vez en 1972, cuando Salvador Allende era presidente de Chile. Entonces se hacía llamar Alberto Ruiz-Tagle y a veces iba al taller de poesía de Juan Stein, en Concepción, la llamada capital del Sur. (13)

こうして、書き出しにおいてビーダーの存在がアジェンデ時代のチリと関連付けられるが、これもまた、作品の舞台がアジェンデ政権崩壊の寸前であることを読者に連想させる効果がある。さらに、当時ビーダーがルイス・タグレーという偽名を使っていた事実を記述することによって、ビーダーには裏の顔があるということも示唆している。この裏の顔こそがこの物語の中軸となり、語り手の過去の自分と、現在物語を語っている自分を結んでいる。物語が進むにつれて、書き出しにおけるアジェンデ大統領の任期への言及が、後のピノチェ政権の下で行われた拷問と殺人事件に対する予言的な表現になってくる。個人の記憶と国家の歴史を直接的に結ぶこの手法は、『落下する物の音』にも見ることができる。

バスケスの小説の中心人物の名前はリカルド・ラベルデ（Ricardo Laverde）である。彼もビーダーと同じく、外見は一般人に見えるが、母国の暗い歴史と関わりを持っている。『彼方の星』では、ビーダーという正体不明の男性の物語が語られるが、『落下する物の音』でこれと同じ役割を果たしているのがラベルデである。物語の書き出しには、コロンビアの 80 年代に最大の麻薬密売業者パブロ・エスコバールが殺されてから数年後、彼の古びた大農園に設置された動物園から一匹のカバが逃げたという、実際にあった事件が語られている。脱出したカバのことが毎日報道されるなか、それを見ている語り手のヤンマラは否応なく謎の人物ラベルデのことを考えずにはいられなくなる。

> Durante las semanas que siguieron, el recuerdo de Ricardo Laverde pasó de ser un asunto casual, una de esas malas pasadas que nos juega la memoria, a convertirse en un fantasma fiel y dedicado, presente siempre, su figura de pie junto a mi cama en las horas de sueño, mirándome desde lejos en las de la vigilia. (2)

このように、物語の書き出しにおいてアルトゥーロ B とヤンマラの回想の引き金となる人物は、いずれも過去に現れた謎の人物であり、その人物を思わせることを聞いた、あるいは見た語り手は、追憶の執筆行為を始めるのである。しかも、この二作を読み進めていくと謎の人物が母国特有の暴力的な歴史に絡んでいるという事実が浮かび上がってくる。その点でバスケスの手法とボラーニョの手法が似ていると言える。

『彼方の星』のアルトゥーロBは詩のワークショップでビーダーに出会う。この作品では、この出会いの場所は彼の少年時代において特別な意味を持っている。そこは、自分

の詩を発表する場所であり、他の詩人に出会って文学について語る場所でもあり、若い芸術家にとって不可欠の出発点である。しかし、この詩のワークショップは失楽園の場所でもある。そこに集うメンバー全員の憧れだった双子、ガルメンディア姉妹が、後にビーダーに殺されるのである。主人公が、自分のグループの間近にいたビーダーがこの二人を殺したという事実といかに対面できるかという問い、つまり、自分と同世代の人間が他の同世代の人々を大量に殺したという、ピノチェ時代を生きたチリ人が直面しなければならない問いへの答えこそが、ボラーニョの小説のテーマである[14]。

小説の中盤、ビーダーが右翼の軍閥のスパイとしてその詩のワークショップへ送られたことが示唆されるが、そのワークショップで初めて主人公と出会う場面においては、すでにビーダーが異端の存在として描写されている[15]。当時のチリにおけるインテリ層の人間とは違い、彼はおしゃれ好きで優雅だった。しゃべり方も他のメンバーと違って知的ではあるものの、そこには独学をしたことを思わせる不思議な要素がある。語り手が述べているとおり、誰もが見分けることができなかった双子を唯一識別できたのもビーダーだった。

『落下する物の音』の主人公が謎の人物ラベレデに出会うのはビリヤード場である。ボラーニョの作品の主人公がビーダーに最初に出会うときの年齢が 18 歳であるのに対して、バスケスの主人公は 26 歳でラベルデに出会っている。大学の法律学部で教鞭を執っているヤンマラは、ボゴタの学生街の近くにあるビリヤードバーに仕事の後に行く常連である。ある日、このビリヤード場に一人の中年男性が姿を現し、じきに常連になる。このバーにはテレビが設置されており、90 年代にコロンビアに衝撃を与えた、麻薬戦争から生じた事件のニュースが流れる。

> De manera que todos los billaristas lamentamos el crimen con la resignación que ya era una suerte de idiosincrasia nacional, el legado que nos dejaba nuestro tiempo, y luego volvimos a nuestros chicos respectivos. Todos menos uno cuya atención se había quedado fija en la pantalla donde las imágenes habían pasado a la siguiente noticia. (7) (…) A ver qué van a hacer los animales. Los pobres se están muriendo de hambre y a nadie le importa (…) Qué culpa tienen ellos de nada.
> Estas fueron las primeras palabras que le oí decir a Ricardo Laverde. (18)

『彼方の星』と同じく、中軸となる人物についての最初の記述が歴史を刻んだ事件と平行して語られている。ボラーニョがアジェンデ時代の晩年とビーダーのワークショップへの登場を重ね合わせているのと同様、バスケスの作品の場合、パブロ・エスコバールの全盛期に起きた数々の事件（大統領の暗殺未遂事件、爆破事件等々）が日常のものとなっていた時期のニュースとビリヤードバーにおける奇妙な人間の登場が平行して描かれてい

る。

4.　二人のパイロットの運命――ビーダーとラベルデ

『彼方の星』では軍政下のチリで一時期羽振りがよかった空軍のパイロット、カルロス・ビーダーが犯した犯罪の経緯が語られる一方、『落下する物の音』ではコロンビアが麻薬密売の地域として有名になりはじめたころに大麻とコカインを密輸していたパイロット、リカルド・ラベルデの物語が語られている。この二人がパイロットという職業に就いていたことは、共通点として目を引く。本章ではこの共通点を出発点に彼らの類似点と相違点について考えてみたい。

すでに指摘したように、両作品には自分の生活にある時点で入り込んだ謎の人物を振り返るという、共通の回想録的な構造がある。その上、ラベルデはコロンビアの麻薬密売、ビーダーはピノチェ政権の体制化した暴力というように、両者が自国特有の暴力的な歴史と黒い過去を持っていることが、それぞれの国の腐敗の象徴となっている。しかし、プロット上で彼らが果たす働き（物語論的な中軸として機能する役割、作家の自国の惨状を描くための物語論的なツール）が構造的に似ている一方で、倫理的な視点に沿って両作品を読むと、大きな相違点があることに気づくだろう。それは、ビーダーが悪の権化に近い存在として描かれているのに対して、ラベルデはより複雑な人物として描かれており、読者は善良な人物が悪行の世界に足を踏み入れてしまったことによって人生を台無しにした物語を読んでいる気がする。

おそらくこの現象は、二人の作者が自身と物語の対象の間に置いている距離から生まれるものだと思われる。たとえば、ボラーニョの小説には推量を基にして殺人を描写している場面があるが、ビーダーの心理描写は皆無である。外面はブラックボックスのように見えるものの、ボラーニョはあえて中身を描いていない。一方バスケスの小説の場合、主人公ヤンマラにとって、当初ラベレデは過去が不明な人物だったが、結末には彼の人生についてかなり多くの真実を読者と共に把握している。

では、パイロットであることはどのような意味を持っているのだろうか。ビーダーが芸術家兼パイロットとして最初に登場する場面でも、空軍とファシスト思想の関係を示唆するような描写となっている。『彼方の星』の第一章で、語り手が噂と推測を基に想像した、ガルメンディア姉妹の殺人の場面を語る[16]。姉妹の一人と寝た後、夜中におきて叔母の部屋に殺しに入る場面で語り手のアルトゥーロ Bは初めてビーダーに対し、ルイス・タグレと呼ぶのを止めてビーダーという名前を使う[17]。しかし、主人公がビーダーとしての人物を自分の目で実際見たと述べている場面は第二章である。見たのはビーダーではなく、

ビーダーが操縦していた戦闘機で、アルトゥーロBはそれを保留所の庭で見たのだ。「カルロス・ビーダーの最初の詩人としての活動」として描かれているこの場面では、監禁生活によって発狂し始めていたある囚人が、ビーダーが操縦している戦闘機をナチのものだと執拗に言い張る。“Es un Messerschmitt 109, un caza Messerschmitt de la Luftwaffe, el mejor caza de 1940.” (36) この場面に「ナチ」というシニフィエを持ち込むことによって、この一連の出来事に不吉な雰囲気をまとわせ、同時に戦闘機をピノチェ政権という右翼政権の象徴に仕立てることもできる。戦闘機の煙で空に創世記の一節を綴るという行為は、チリ国土の上に絶対的な権限のシンボルとなる文章を描き、ピノチェの右翼思想を正当化する行為として解釈することができる。神が光を創った場面の文章を描いた後、ビーダーが締めくくりに書いた“Aprendan”「これに習いたまえ」という一句は、唯一彼の独創から生まれた言葉であると同時に、ピノチェのファシスト思想の権力に従うように要求する、チリの国民に対しての戒めとして理解することもできる。この政権下で次々と女性詩人の殺人を繰り返すビーダーは、後に何回もこの女性たちの名前を空の詩の内容に織り込んで「チリの新しい詩」の生みの親として名を馳せる。この「チリの新しい詩」(la nueva poesía chilena)に不可欠なものこそが大量の殺人だというブラックな皮肉は、ボラーニョによって黙々と作中に示唆されている。

つまり、高度な技術から生まれる現代性の象徴であり、国民のためにあるはずの戦闘機が『彼方の星』では悪の体制の一部となり、その言説を広げるための道具になりさがる。これを操縦するビーダーも芸術という名の下で自分の悪行を暗視的に描いている。ボラーニョの作品において頻繁に問題とされるテーマ、「悪と芸術の対立と混合」がまさにこの戦闘機の詩に象徴されている。

ビーダーが飛行場で空の詩のパフォーマンスを行うシーンを連想させる場面が、『落下する物の音』にもあり、そこにも戦闘機が象徴として登場している。ヤンマラは、ビリヤード場で出会ったラベルデの死後、彼の過去について探索した末、彼の娘と対面することになる。父親が子供のころに死んだと思い込んでいた彼女も、父の死後、彼の正体をよりよく理解するべく様々な手を使い、父の過去を取り戻そうとする。その欠片の一つは数十年前の新聞の切り抜きである。

その記事は、ラベルデの祖父がラベルデの父を飛行場のショーに連れて行った日の事件を記録したものである。ラベルデの祖父は民間人ではなく、コロンビアの空軍でペルーとの戦争で目覚しい活躍を見せた優秀なパイロットだった。その日は彼が自分の子供、ラベルデの父に国軍が所有している戦闘機を誇らしげに見せるはずだったが、そこで悲劇が起こってしまう。空中で飛躍していた戦闘機が、大統領の歓心を買おうとした操縦士の傲慢で地面に近づきすぎて墜落してしまう。爆発とともにから飛んできた高温のオイルの数滴

がラベルデの父の顔に触れ、一生消えない傷跡を残してしまう。

> Nadie supo nunca como ocurrió, si el avión se rompió en el aire o si fue cosa del choque. Lo cierto es que Julio recibió un escupitajo de aceite de motor en plena cara, y el aceite le quemó la piel y la carne, y fue una suerte que no lo matara, como les sucedió a otros. (100)

顔の傷のことが禁句である家庭で育ったラベルデ自身は、祖父のあとを継ぐようにして操縦資格を取る。しかし、祖父と違って誠実さと辛抱の両方が求められる空軍への入隊に興味を示さない。その代わり、気ままで束縛のない生活ができると思い込み、民間企業のパイロットを目指す。

しかし、時代は 70 年代のコロンビアである。アメリカ人の妻と新婚生活を送るために、ラベルデが仕事として手掛けるのはマリファナの違法輸出である。彼の祖父が操縦した戦闘機と違って、小型飛行機を低い高度で飛行させ、アメリカ側に大麻を運ぶという仕事は、最初何のリスクもなく遊びのように見える。しかし、ある日友達の紹介で、さらに高い報酬の得られるコカインを運搬することになる。コカインを運ぶ最初の仕事でラベルデは逮捕され、数十年の判決を言い渡される。牢獄生活が終わり、自国のコロンビアに帰るとき、語り手ヤンマラに初めて出会う。ラベルデは無口で自分の過去に関して何も言わないまま、ヤンマラのそばで殺されてしまう。

5. むすび

『彼方の星』のラストでは私立探偵のロメロがビーダーの家に入り、彼を殺害することが強く示唆されている。語り手のアルトゥーロ B がロメロに、ビーダーはもう誰も傷つけないだろう彼を殺す意味があるか、と問い詰めるのに対して、ロメロは簡潔に答える。

> En cuanto a que no puede hacer daño a nadie, qué le voy a decir, la verdad es que no lo sabemos, no lo podemos saber, ni usted ni yo somos Dios, sólo hacemos lo que podemos. (157)

ロメロが自分の責任を回避しようとしているとも、アルトゥーロ B を安心させようとしているともどちらの解釈も可能である。このセリフのあと、ビーダーが殺され、『彼方の星』は終わる。

『彼方の星』と『落下する物の音』のあいだの相違の一つは、ビーダーとラベルデの死

ぬ場面にある。『彼方の星』では語り手が加害者の側にいる。アルトゥーロ B はロメロと協力してビーダーの居場所をつかみ、ビーダーの暗殺を否応なしに目の当たりにしてしまう。

それとは逆に、『落下する物の音』では語り手ヤンマラは被害者の側にいる。暗殺者はラベルデを殺す命令があったのだろうが、側にいたというだけでヤンマラが巻き添えになり、重症を負ってしまう。『落下する物の音』の物語の中で、ヤンマラは必死にラベルデが殺された理由を掴もうとする。麻薬密売から足を洗ったラベルデがなぜ今さら殺されたのかという疑問が、ヤンマラにとって命がけの問いになるのである。ヤンマラの過去が彼を追い詰めたのでは、と長い間ヤンマラは思うが、小説のラストで別の理由が読者に提供される。

刑務が終わり、自由となったヤンマラが始めた仕事における同僚が、父の死後、娘に悔やみの挨拶をしに行く。その同僚は、ヤンマラが近いうちに大量のお金を手に入れるから、お金を貸してほしいと言っていたことを娘にふと言ってしまう。ヤンマラは麻薬密売から完全に足を洗っていなかったのである。ラベルデの暗殺者はおそらくロメロと考え方が同じだった。人間である限り、他人の行動を想定することは不可能である。同様に、一人の人間を完全に理解することも不可能である。『彼方の星』と『落下する物の音』の中心にモチーフがあるとすれば、それは母国の歴史の恐怖と、人間の裏にある決して知り尽くせない心だろう。

注

[1] Herralde, pp.121-125.

[2] Pasternosto, p.74.

[3] 両作品はまだ邦訳がないため、本稿では拙訳のタイトルを使っている。

[4] 20 世紀後半のラテンアメリカにおける独裁小説に関しては Calviño Iglesias と Bellini を参照。

[5] 文明と未開の対立に関して Dessau を参照。

[6] もちろん、ガルシア＝マルケスの『族長の秋』は話題に上がるが、その他にもアストゥリアスの『大統領閣下』など数多くの作品がある。

[7] Noemi p.88 “Interesa pensar el modo en que esa violencia externa pasa a constituir un componente clave de muchas narrativas contemporáneas."

[8] 『2666』でアメリカからサンタテレサを訪問したフェイトも、麻薬密売を含んだ崩壊した雰囲気に気づく。 “Le hablo de los asesinatos de mujeres, de posibilidad de que todos los crímenes hubieran sido cometidos por una o dos personas, los que los convertía en los mayores asesinos en serie de la historia, le hablo del narcotráfico y de la frontera , de la corrupción policial y del crecimiento desmesurado de la ciudad.” (pp372-373, 下線引用者)

[9] 2012年2月にロンドン文芸協会が運営しているプログラム　A Room for Londonの最初の参加者として選ばれるなど、イギリスでは彼の評価が高いと見られる。＜http://www.guardian.co.uk/books/

audio/2012/feb/02/juan-gabriel-vasquez-conrad-podcast＞

[10] バスケスは『百年の孤独』のマジックリアリズムを「私の小説では使えない」と述べている。バスケスの『百年の孤独』論はメキシコの Letras Libres 誌で発表された。“En efecto, mis lecturas siempre habían tenido la actitud desapegada y un poco irónica con que se escuchan pacientemente los cuentos de un abuelo, siempre admirando su carácter incontrovertible de obra maestra, pero consciente de que esa obra maestra no me servía para nada.” (“El arte de la distorsión.”)

一方、ボラーニョもマジックリアリズムに対して辛辣でイサベル・アジェンデなどのような、マジックリアリズムを使う作家を盛んに批判した。（たとえば、Bolaño, “Entre Paréntesis “ p. 102: “Isabel Allende. Su glamour de sudamericana en California, sus imitaciones de García Márquez, su indudable valentía, su ejercicio de la literatura que va de lo kitsch a o patético.”）

[11] バスケスがヨーロッパに移住し、母国をテーマとした小説を書いた経緯に関しては、イギリスの The Guardian 誌に発表したインタビューを参照。＜http://www.guardian.co.uk/books/2008/sep/23/fiction.juan.gabriel.vasquez.informers＞

海外移住に関しては先代のラテンアメリカ文学者のことも視野に入れていたという。“It's a kind of Latin American tradition to leave your country to be able to write." He cites Rubén Darío, García Márquez, Vargas Llosa, Carlos Fuentes, Julio Cortázar - "all of those great names made themselves as novelists abroad. It's almost a kind of need we have."

[12] ボルヘスとノーベル賞に関しては『絆と権力――ガルシア＝マルケスとカストロ』pp. 169-171 に参照。ボルヘスがチリ大学で名誉博士号を授与された背景に関しては＜http://www.lanacion.com.ar/150373-por-que-borges-nunca-obtuvo-el-premio-nobel＞などを参照。

[13] 両作品において「恐怖」という言葉がキーワードになっている。『彼方の星』の結末ではアルトゥーロ B はビーダーが殺されたことに対して「恐ろしいこと」だったというが、この発言を小説全体の物語に当てることもできる。Nunca me ha ocurrido algo semejante, le confesé. No es cierto, dijo Romero muy suavemente, nos han ocurrido cosas peores, piénselo un poco. Puede ser, admití, pero este asunto ha sido particularmente espantoso. Espantoso, repitió Romero, como si paladeara la palabra. (157)

『落下する物の音』でも「恐怖」はボゴタ市民の生活に大きな影を落としているとされる。主人公が性的に不能になる原因も、この恐怖にある。El médico siguió hablando, no había manera de que dejara de hablar. El miedo era la principal enfermedad de los bogotanos de mi generación, me decía. Mi situación, me decía, no tenía nada de particular: pasaría eventualmente como había pasado para todos los que habían visitado su consultorio. (42)

[14] 双子の殺人が主人公にとって大きなトラウマであることは、彼が未だに彼女たちが出てくる悪夢をときに見ることからわかるはずである。 Ruiz-Tagle, el único que siempre sabía quién era Verónica y quién era Angélica. Yo sobre ellas apenas puedo hablar. A veces aparecen en mis pesadillas. (15)

[15] Las diferencias entre Ruiz-Tagle y el resto eran notorias. (16)

[16] A partir de aquí mi relato se nutrirá básicamente de conjeturas. (29)

[17] Unas horas después Alberto Ruiz-Tagle, aunque ya debería empezar a llamarle Carlos Wieder, se levanta(31)とあるが、すでに出だしに、ルイス・タグレの正体がビーダーであるという事実が暴かれている。そのほか、ビーダーの名前がドイツ語で持つ意味をめぐる記述（50）もこの小説において重要である。

参考文献

Bellini, Giuseppe. El tema de la dictadura en la narrativa del mundo hispánico, siglo XX. Alicante: Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, 2008. Consulted on 2012-08-27 in

<http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/el-tema-de-la-dictadura-en-la-narrativa-del-mundo-hispnico---siglo-xx-0/html/01e5ae86-82b2-11df-acc7-002185ce6064_29.html>

Bolaño, Roberto. *2666.* New York: Vintage Español, 2009.

---. *2666.* Trans. Wimmer, Natasha. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2008

---. *Estrella Distante*. New York: Vintage Español, 2009.

---. *La Literatura Nazi en América*. Editorial Planeta, 1999.

---. ed. Echevarría, Ignacio "*Entre Paréntesis*" Anagrama, 2004

Calviño Iglesias, Julio. *La novela del dictador en Hispanoamérica*. Madrid: Instituto de Cooperación latinoamericana, 1985.

Dessau, A. "Civilización y barbarie en la nueva novela latinoamericana." *Actas del Quinto Congreso Internacional de Hispanistas*, Bourdeaux, Instituto de Estudios Ibéricos e Iberoamericanos, Université de Bordeaux III, 1977.
Consulted on 2012-08-27 at <http://cvc.cervantes.es/literatura/aih/pdf/05/aih_05_1_030.pdf>

Herralde, Jorge. "Vida Editorial de Roberto Bolaño para Roberto Bolaño." in González Ferriz, Ramón ed. *Jornadas Homenaje: Roberto Bolaño (1953-2003) Simposio Internacional.* Barcelona: ICC Casa America a Catalunya, 2005.

Noemi, Daniel "Y después del Post, ¿qué?" in Montoya Juarez, Jesus and Esteban, Angel ed. *Entre lo local y lo global: La narrativa latinoamericana en el cambio de siglo (1990-2006)* Madrid: Iberoamericana, 2008.

Pasternosto, Silvana. "Interview with Juan Gabrial Vásquez." *Bomb*. Winter 2010 Issue, p.74. Consulted on 2012-08-27 at <http://bombsite.com/issues/110/articles/3374>

Vásquez, Juan Gabriel. *El ruido de las cosas al caer*. Madrid: Alfaguara, 2011. (Kindle edition)

----. "El arte de la distorsión." Letras Libres. Enero 2007. Consulted on 2012-08-27 at <http://www.letraslibres.com/revista/convivio/el-arte-de-la-distorsion>

----. *Los informantes*. Madrid: Alfaguara, 2004. (Kindle Edition)

アンヘル・エステバン、ステファン・パニチェリ.『絆と権力――ガルシア＝マルケスとカストロ』野谷文昭訳. 新潮社、2010.

Las circunstancias tras la caída de dos pilotos

Estrella Distante de Roberto Bolaño y *El ruido de las cosas al caer* de Juan Gabriel Vásquez — Un análisis de estas obras como novelas de memorias personales y nacionales

AZUAJE-ALAMO Manuel

Este artículo presenta una comparación entre la novela de Roberto Bolaño, *Estrella distante,* y la novela del escritor colombiano Juan Gabriel Vásquez. *El ruido de las cosas al caer*. Esta comparación tiene como punto de inicio el hecho de que ambas novelas están narradas en primera persona por un personaje cuya historia está basada no tanto en sí mismo sino en un hombre de su pasado.

En el caso de la obra de Bolaño, se trata del piloto, poeta y asesino, Carlos Wieder, cuya historia tiene como trasfondo la dictadura de Pinochet en Chile. En el caso de la obra de Vásquez, se trata de Ricardo Laverde, un piloto de contrabando cuya historia tiene como trasfondo el principio de la expansión del problema del narcotráfico en Colombia.

Ambas novelas pueden ser entendidas como pertenecientes a diferentes tradiciones dentro de la literatura latinoamericana; *Estrella distante* pudiendo ser entendida como una novela de la dictadura, y *El ruido de las cosas al caer* pudiendo ser categorizada como una novela del narcotráfico. Sin embargo, si el lector se enfoca en sus estructuras narrativas encuentra una clara similitud en el hecho de que ambas novelas proponen la figura de un misterioso del pasado, Carlos Wieder y Ricardo Laverde, cuyas vidas, contadas en ambos casos por una voz que es cercana al autor, se vuelven narrativas que intentan simbolizar los problemas morales de Chile y Colombia en momentos claves de su historia.

De esta manera se puede ver que, aun siendo sus estilos y atmosferas diferentes, estas dos novelas se pueden entender como dos novelas con estructuras y estrategias narrativas similares frente a una realidad histórica que es también similar y diferente a las de otros países de Latinoamérica.